

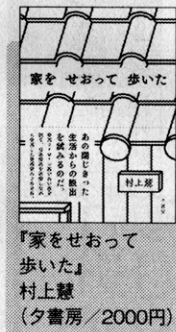


サブカル本の真骨頂

日常や常識を剥ぎ取り 自らの足で歩き続ける

発泡スチロール製の白い家をせおいながら、日本各地を練り歩いた美術家の1年間を記録した日記。彼は、風変わりな旅人になりたいわけではないし、自分探しをするために旅に出たわけでもない。「僕はむしろ自分を見捨てるのに必死」なのだ。

毎夜、泊まる場所を探す。たくさん声をかけ、逆に声をかけられる。1988年生まれの彼は、時折聞こえる「若いからできていいね」との声に違和感を覚える。そういう人は、勢いませに旅する「非日常」の人と決めつけ、そのうち「私たちと同じような日常」に取り込まれるはず、と自分を納得させているからだ。移動する家への個々の反応が、日常を窮屈にする「常識」の所在を明らかにしていく。その



常識を軽快に取り除いてくれる人にも出会う。ある住職に「最初この家を見たときどう思われましたか?」と問うと、「いや別になにも。だつてみんな家は持つてるじゃない」と返ってくる。情報だらけのネット社会を嘆きつつも、その情報を効率良く取捨選択したがる私たち。だが、そもそもそこに情報がある、との認識は正しいのか。彼は「錯覚だ」と言い切る。「錯覚に対抗するには歩くしかない」のだ。社会を作り上げるシステムより、自分の身体に重心を置く。不動産や家に拘束されているからこそ個人の思案が閉塞的になる。人は依存しあつて生きていくのに、それがひとつの家に集まっているからわかりにくくなっている、との指摘が、読み手の視界をぐいぐい切り開いていく。「嘘でもまた聞きでもない日々」を突き詰めると「人生を肯定できるような気がする」と著者。銭湯からの帰り道、歯を磨きながら国道を歩く彼の姿を思い浮かべながら読む。動く家に吸い寄せられていく人間との、その場限りの対話が染み入る。

武田砂鉄

(たけだ・さてつ) 1982年、東京都生まれ。ライター。出版社勤務を経て、2014年よりフリー。初の著書『紋切型社会 言葉で固まる現代を解きほぐす』で第25回Bunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。最新作に『芸能人寛容論』